西川図書館５周年記念

菅原峻さん講演会

「みんなの図書館・わたしたちの図書館」

講演記録

主催：新潟市立西川図書館

協力：西川図書館サポーターのみなさん

日時：平成22年11月６日(土)　午後２時～４時

会場：西川学習館１階　講堂

もくじ

○菅原　峻（すがわら・たかし）氏のプロフィール…… i
○菅原峻氏著作…… i
○図書館は本の森です
　森はわたしたちの宝物　森を育て、守るのは誰？　本の森ということで見えてくるもの…… 1
○百聞は一読に如かず　百読は一見に如かず　百見は一体験に如かず…… 3
○市民の暮らしに役立ち、すべての市民の幸せをつくりだす
　おなかの中の赤ちゃんも図書館のお客さん…… 4
○少年は故郷を出て行く、しかし、少年の心から故郷は出て行かない…… 6
○本を読まない私にも、図書館には坐るところがある…… 7
○市民が互いに交わり、文化を創り、次代に伝える……10
○図書館から〈としょかん〉へ
　読む・書く　視る・聴く　話す・奏でる　作る・遊ぶ……10
○図書館には人生と同じように友達が必要です……13
○図書館は誰のものですか　住民の、住民による、住民のための図書館……13
○図書館友の会……15
○図書館は５年で１歳……15
○図書館づくりを成功させる定石……16
○図書館が良くなるも、ダメになるも住民次第……17

○質　疑　応　答 ……19

○図書館とわたしたち（イラスト）……25

● 菅原　峻（すがわら・たかし）氏のプロフィール

（図書館計画施設研究所所長　・　『としょかん村』発行人）

1926年北海道生まれ。1953年３月文部省図書館職員養成所卒、同年４月から社団法人日本図書館協会に勤務。同協会を25年勤務ののち1978年３月に退職し図書館計画施設研究所を創設。同所長。アメリカ合衆国、北欧、東欧などの海外の図書館事情を視察し、1975年にはフィンランドで開催のユネスコ図書館建築会議に参加。研究所の創設後は、全国の多くの図書館計画に携わり、図書館のコンサルタントとして、幅広い活動をしている。情報誌『としょかん』を100号まで発行した。その後は、季刊『としょかん村』を発行し、図書館に関わる情報発信を行なっている。常に、利用者や市民の目線で図書館を考える語り口は、図書館学や建築の専門家、行政関係の人間とは違い、独自の得がたい人材となっている。また歌人でもある。

● 菅原峻氏著作

『アメリカの図書館四十日』菅原峻著　日本図書館協会　1971

『歌集―朱果』歩道叢書　菅原峻著　川島書店　1976

『公共図書館の計画とデザイン』　R・ミラーほか著　菅原峻訳　日本図書館協会　1978

『母親のための図書館』菅原峻著　晶文社　1980

『わたしたちのとしょかん』　菅原峻著　図書館計画施設研究所　1981.6

『これからの図書館』菅原峻著　晶文社　1984

『図書館施設を見直す』（図書館員選書15）共著　日本図書館協会　1986

『見た聞いた撮ったアメリカの公共図書館　サービスとその建築』図書館計画施設研究所　1992

『新版　これからの図書館』　菅原峻著　晶文社　1993

『白夜の国の図書館』図書館計画施設研究所編　図書館流通センター　1994

『図書館建築22選』図書館計画施設研究所編著　東海大学出版会　1995

『白夜の国の図書館２』図書館計画施設研究所編　リブリオ出版　1996

『白夜の国の図書館３』図書館計画施設研究所編　リブリオ出版　1998

『公共図書館の計画と建設の手引』新訂版　日本ファイリング　1998

『図書館の明日をひらく』菅原峻著　晶文社　1999

『復刻版　としょかん　№１～100』としょかん復刻版刊行会　2005

『としょかん』（2007年１月より、再刊第１号の101号を発行）としょかん文庫・友の会

『図書館友の会養生訓』　菅原峻著　2007

ただいまご紹介いただきました、菅原峻と申します。先日、84歳になりました。今、館長さんのご紹介にもありましたが、もう60年くらい図書館にかかわっていて、図書館、図書館の毎日でした。多分このまま図書館と縁が切れないで一生が終わるのではないかと思っております。これも私の星の導きでしょうから、ぜひ生涯を全うしたい、それが心からの願いでございます。

図書館は本の森です

森はわたしたちの宝物　森を育て、守るのは誰？　本の森ということで見えてくるもの

今日、お話しをする筋書きといいますか、話したいことは、このレジメの１枚に書いてございますが、このとおりでなく気ままにお話をさせていただこうと思っています。1996年ですから、14年前になりますがスウェーデンにまいりました。スウェーデンの首都はストックホルムですが、第二の都市であるイエテボリというところに行きまして、そこで図書館の勉強をしました。

休日は自由時間だったので、街へ出ました。広い通りを歩いていきますと、その道に沿って大きな森がございました。道から入り口が二、三か所あって、休日のせいもありますが、イエテボリの大勢の市民が自由に出入りしていました。私もせっかく来たのだから、この森へ入ってみようと思って入りました。そうすると、きちんと整備された森で、中に大きな池もあり、池を巡って芝生が張ってあったり、さまざまな腰掛けも用意してありました。広場があって、若い連中が集まって楽器の演奏もしていたり、お年寄りは池に面するベンチに座ってゆっくりとしていました。車椅子の人もいます。フラミンゴという鳥がいますが、フラミンゴが池から上がってきて、道路の真ん中で一本足で立って瞑想しているというような風景にも出会いました。私はその森に入ってずっと歩きながら、「あらっ、これは図書館の姿そのものじゃないの」と思ったのです。市民はだれでも自由に出入りをします。そしてまた、入ったところで思い思いの時間の過ごし方をしているのです。おしゃべりもする、あるいは子どもを連れて、乳母車を押して歩いている人もいます。そうして、私が感じたのは、この森は市民が育てている森であるということでした。もちろんプロのお掃除屋さんがいて、道をきれいにしていますけれども、もともとそんなに汚れることはありません。そして、古くなった木は払う、枝も落とす。それから、みんなが踏んで固まった土は、ときどき掘り起こして空気を入れ換える。そのようにして、市民が森を育てている様子が分かりました。それで「ああ、図書館はこれだよ」と感じたのです。市民が自分たちの森を育てるように、図書館も市民が手

をかけ、声をかけて育てていく、そういうことでした。

私は、以前から図書館は本の森と言ってきたのですが、ただ言葉だけだったかもしれないなと思ったのです。本当の森の様子というのはこういうものかなとそのときに気がつきました。それで、レジメにも図書館は本の森ですと書きましたけれども、本の森という意味を皆さん自身に考えてみてほしいのです。もともと図書館というのは、私たちが必要としてつくるものです、どのようなものがほしいかをみんなで考えて、自分たちがお金を出し、力を出してあい、自分たちで始めたものなのです。

北欧のフィンランドにはもう５回くらい行ったのですけれども、フィンランドは1917年、20世紀になってレーニンがロシア革命を起こすまでは、ロシアの自治領だったのです。それが独立しまして、あと７年たつと独立100年になりますが、私が行ったときはまだ100年たっていない国だったのです。そのフィンランドが1994年、公共図書館200年を記念する盛大な行事がありました。独立してまだ100年にもなっていないのに、どうして公共図書館200年なのと思うでしょう。フィンランドは、今お話ししたように、ロシアの力が強いときは、ロシアに、スウェーデンの力が強いときはスウェーデンに、あっちに取られたり、こっちにいったりという状態が続きました。そして、ロシアの自治領だったころにバーサーという海沿いのまちで市民が本を持ち寄って文庫を始めました。日本流で言うと文庫ということになりますが図書館を始めたのです。自分たちで持ち寄った本をみんなで読み合います。新しい本もお金を出し合って買いました。そして、やがてだれでも、会費を払えば会員になれ利用することができるようになりました。そのうちにすべての住民・市民であれば利用できるというようになって、図書館が大きくなっていきました。それがだんだんとフィンランド中に広まっていったのです。つまり住民が必要とするものを自分たちで考えて、自分たちの力で作り上げてきたのが図書館なのです。昔から図書館があって、皆さんがそこに集まってきて生活を始めたのではないのです。そのことが、私が言う「図書館は本の森」の基本にある、「これは私たちの森だよ」という意味になります。

皆さん、お読みになった方はいらっしゃるでしょうか。あるいはテレビのドラマがありましたのでそちらを見た方もいることでしょう、『大草原の小さな家』というアメリカの本です。一家で西へ西へと移動しながら、開墾し、農業を始めて、そういう人たちが集まって自然に村ができます。そのときにドラマでは、みんなで自分たちの必要な教会を作りました。丘の上に教会を作ったのです。その教会は日曜日には礼拝に村中の人が集まります。ほかの月曜から土曜日は子どもたちの学校になっていました。それもまた、みんなが自分たちの力を合わせてやったことです。図書館を考えるときに皆さん、このことを心に

刻んでいただき、忘れないで欲しいと思います。だれのものでもない、私たちのものだという強い気持ちを持つことが、これから図書館を広め、発展させていくうえで一番大事なことです。

百聞は一読に如かず　百読は一見に如かず　百見は一体験に如かず

レジメの一番上のほうに３行書いてあります。「百聞は一読に如かず」、私たちは「百聞は一見に如かず」というように教わってきました。私もずっとそう思っていたのですが、こうして図書館のことを仕事にしたり、考えたりするようになったとき少し考え直してみることにしました。図書館について考えるときに、こうして人の話を聞くのも大事だけれども、まずその前に読んでおくべき本を読もうということです。百人のお話を聞くということ、その場合いい話もあるし、どうでもいいと言っては叱られるけれども、いろいろあるでしょう。それより、まず基本として大切なことを書いてある本を１冊読みましょう。どれがそうかというと、菅原峻さんの書いた本がいいと言いたいけれども、それは別として、とにかく「百聞は一読に如かず」です。次に100冊の本を読むこともいいけれども、実際に一つの図書館を見てみましょう。それが「百読は一見に如かず」で、図書館がよくわかるということです。

新潟には、随分しばらくぶりで来ました。もういつ来たかも忘れるくらいですけれども、それで昨日から今日、ずっと松原館長さんから中央図書館と西蒲区の図書館をご案内いただいて、見て回りました。見ると、私自身の勉強になります。全部が全部これでいいよという図書館はないのですけれども、どの場合にも反面教師といいますか、そこから私は私なりに学ぶものがあるのです。皆さんも実際の図書館をご覧になって、感じるところがあれば、それが一見となります。ぜひそうやって見てみてください。

次が「百見は一体験に如かず」です。いろいろな図書館をたくさん見るのは大事なことですが、図書館の実際を体で体験することが一番大切です。ですから皆さんどこかお出かけになることがあって時間もあったら、そのまちの図書館を覗いていただくとよいと思います。それが体験ですけれども、できれば一日その図書館にいてみてください。座ってみるだけではなくて、あちらこちら歩いて、さわってみたり、あるいは貸出デスクでも調べ物のデスクでもいいですけれども、そこへ行って日ごろ疑問にしていることを聞いてみてください。私、今回はできませんでしたけれども、一人で行くときには必ず何か聞いてみることにしています。

ところがこのごろ、新潟市の中央図書館もそうだったんですが、貸出デスクなどは図書館の職員でない人が座っているでしょう。昨年、山口県に行ったときに体験したのですけれども、どうもその図書館もデスクに座っている人は、どこかの貸出を請け負った会社の職員かなと思うのですけれども、私は何を聞いたでしょうか。年寄りでしょう、しょっちゅうのどが渇くのです。カウンターの端のほうに座っていた若い人に、私はのどが渇いてどうしようもないのだけれども、どこかお水飲むところはありませんかと聞いたのです。そうしたら、この人は何を聞くの？という顔をしたのです。図書館のことを聞くなら分かるけれど水を飲むのにどうしたらいいかと聞かれて、その人は本当にどきっとしたらしいのです。それでどうしたらいいのか困ったという顔をしていたものだから、私のほうから結構ですと言ったのです。

以前は、私が調べたいと思っていることを常にいくつか持っているのでそういうことを聞いていたのです。そうすると、その図書館に点数を付けることもできます。そういうわけで、皆さんも実際に図書館を体験してみてください。この新潟市にも図書館はいくつもあるでしょうけど、みんな違うのです。今日も岩室、潟東、西川の図書館を館長さんに案内していただいて見ました。みんな違っていました。それぞれ違う問題を抱えていました。また共通した問題もありました。今は西蒲区と限定しましたけれど、子どもの本のある場所を見ましたら子どもの絵本というのは表紙が見えるように並べておかなくてはいけないのですが、ほかの本と同じように差し込んでありました。「これはだめだね」とつい言ってしまいました。ぜひ表紙を見せるように並べましょう。これも実際に体験してみなければ出てこないことなのです。

そういうわけで「百聞は一読に如かず」、皆さんよろしければ本も読んで見ましょう。「百読は一見に如かず」、実際に図書館を見て、自分なりの点数を付けてみましょう。「百見は一体験に如かず」、たくさん見るのもいいけれども、やはりじっくり図書館を経験しましょう。そうすると、皆さんが図書館というものはこういうものか、あるいはこうしたいという気持ちが、だんだん芽生えてきます。そして、次に私のまちの図書館は、こうあってほしいなという願いに結びついてきます。そういう順序なのです。

市民の暮らしに役立ち、すべての市民の幸せをつくりだす

おなかの中の赤ちゃんも図書館のお客さん

さて次に私がいま欲しいと思う図書館はどういったものかをお話ししてみましょう。今、

ブックスタートという事業が各地で行なわれていますが、これはイギリスで始まったものですが小さい子どものときから絵本に親しませるもので、子どもの生涯を通じた本との仲立ちの出発点となるものですね。ブックスタートというのはそういうものなのですけれども、これは生まれてきてからの話ですよね。私は、赤ちゃんがおなかの中にいるときから、図書館のお客さんですよと言っています。皆さんはお腹の中にいてどうするのと思ったでしょうか？　霊感でも持っているのかしら？　そうではありませんね。お母さんが図書館で好きな本を読んだり、好きなＤＶＤを見たり、音楽を聴いたりすることは、おなかの中の赤ちゃんも一緒に図書館を体験していることになりますよね。やがて赤ちゃんは生まれてきます。赤ちゃんがどうして言葉というものに巡り会い言葉を覚えていくでしょうか。それを私は聞きかじりですけれども、赤ちゃんというのは言葉のシャワーの中で育つものだそうです。まわりからいっぱい言葉が降ってきます。そうした中に赤ちゃんがいて、やがて言葉に目が開き、耳が開いて、やがてお母さんやお父さん、おじいさん、おばあさんの語りかけることが分かってくるのだそうです。そのころから本と生涯にわたる交わりが始まるというのです。私もなるほどなあと思いました。そして、１歳、２歳、３歳、４歳と育ちます。学校に入るまでが言葉を覚えるうえで、生涯でもっとも大事な時期だそうです。

ところが、私自身は北海道の小さなまちで生まれ育ったのですが、うちには本などというものは全然ありませんでした。絵本も読み物もない、そういうところで育ちました。小学校へ入って図書室もありませんでした。やっと１年生のときにおばあちゃんが教科書を取り次いでいるお店から『小学１年生』という雑誌が出ていることを教えてもらいそれを取ってくれることになりました。そのとき初めて、小学校１年生になってから私は活字と出会ったのです。ただ、今こうして話しながら思い出すのは、おじいさんが器用な人だったのでしょうけど、お習字の白い半紙を縦に二つに折って何枚か重ねて綴じて帳面を作り、それに自己流に絵を描いては、私にそれを見せながら昔話をしてくれた記憶があるのです。今、それを取っておいたら、なんでも鑑定団に出しどんな値段になるのかと思ったのですが、どこかに行ってしまってもうありません。

それと、じいさん、ばあさんのお客さんがうちに来ると、私はその帳面を持っていって、絵を描いてとお願いしました。そのころ、私は納谷という姓だったのですけれども、後でおばあちゃんに聞いたのですが、納谷さんのうちへ行くと孫に絵を描かされるから行かないと言っている人がいたという話です。私はそのようにして育ち今こうして図書館の話をしているのは、不思議な縁だと思うのですが、やはり学校に入って活字と面と向き合うようになってからでは遅いのです。まだ、学習、

勉強などの始まる前に、ゼロ歳、１歳、２歳、３歳、４歳、５歳、６歳といった時期にきちんと本と生涯を通じた友達の関係が作られていかないと、本当の図書館の友達にはなれません。私はそう思っています。

少年は故郷を出て行く、しかし、少年の心から故郷は出て行かない

それはそれとして、やがて学校へ入って、勉強をしながら読書もするようになります。そして、中学校、高校へ進んでいくわけですが、学校図書館でどのように本とのつきあいを続けていけるか、これも大きな問題です。そこに書いてありますが、「少年は故郷を出て行く、やがて故郷を離れる。しかし少年の心から故郷は出て行かない」。数年前に、私が病気をして入院したときに子どもが文庫本を何冊か買ってきてくれたのです。それが、図書館長が主役のミステリーだったのです。多分新潟市の図書館にも入っているでしょう。図書館長の何とかというシリーズ本だと思います。その中の１冊、『図書館の美女』を読んでいくと、あるところでこの文句に出会ったのです。「少年は故郷を出て行く、しかし、少年の心から故郷は出て行かない」。私、そのときは本当に電気ショックを受けました。これは一体何、「少年の心から出て行かない故郷」って一体何でしょうか。皆さん何だと思いますか。私はいつも図書館だけよければ、この世は万歳なので、すぐ図書館に引きつけますけれども、「少年の心から出て行かない故郷」というのは、少年が子どものころ毎日を過ごした図書館での経験、ただの経験ではない、すばらしい経験というのが私の結論だったのです。やがて、少年はまちを離れて、あるいは結婚してこのまちからほかへ出ていっても、ときどき帰ってくることがあるでしょう。お里帰りをするわけです。そのときに、図書館はどうなったかなと、まず図書館に足を運ぶんです。子どもが休暇で戻ってきたら、図書館のあの席は、今どうなっているかなと思うのです。図書館の周りの植え込みも大きくなっていることでしょう。やはり図書館そのものも年を取ったなと思いながら、図書館で少年のころを過ごした思い出に浸ります。そのような図書館を私たちは用意し、育て、やがて次の世代に引き継いでいかなくてはいけない責任があるのです。子どもはただ、勉強すればいいのではないのです。図書館で司書と交わり、友達とおしゃべりをし、すばらしい本に出会って、そして当然のことながらしっかり勉強して、やがて社会に出ていく、そのゆりかご、あるいは巣箱と言ってもいいのですが、それがすばらしいものであるように私たちが手をかけていかなくてはいけないです。

学校図書館はもちろん大切なところです。新潟市では学校図書館支援センターを公共図書館においているそうですね。これはこれで大切なことだと思っていますので、ぜひ継続していただきそういう施策が進むように願っています。小さな、言葉を覚えはじめるころからの本とのつきあい、やがて少年少女になって、図書館ですばらしい体験をし、その記憶を残してまちを巣立っていく、そういうことを望んでいます。

さてもう一つ、私自身のことです。今、84歳ですけれども、60歳になってから車の免許を取ったのです。千葉のかなり田舎に引っ越して、車なしには生活できないので、がんばって60歳になってから免許を取ったのです。そしてずっと60代、70代とゴールド免許で過ごしてきました。ところが80歳になったときにどうした弾みか、自分のうちに車をぶつけたのです。どーんとね。ああもうだめだと思いました。やはり高齢者の運転というのは危険きわまりないことを自分で体験しました。そして、うちの者にもう車に乗ってはダメだと言われ、そしてやめました。

そこで一番困るのは何でしょうか。図書館に行けなくなったのです。小さい図書室があって、そこまで歩けば15分から20分くらいです。それは健康のためにいいのではないかと思い往復してみました。ところが、そうしてみたところまた行ってみたいという魅力がないのです。確かに本は並んでいて、ちゃんと貸出カードがあれば本を借りられるけれども、本を借りるだけで、20分、往復40分も歩くことはできません。車でも行けない、歩いても無理だ。自転車も禁止されてしまっています。もう図書館には縁がない。20分かけてでも行ってみようという魅力のある図書館ならいいのだけれども、魅力は全然ゼロなのです。自分のまちの話ですが魅力がなかったのです。

本を読まない私にも、図書館には坐るところがある

いつでしたか梅雨のころ、鳥取県へ行きました。まだ図書館のない町で、図書館を計画しようというお話があって出かけたのですけれども、列車を降りてみたら無人駅なのです。町の人は勝手を知っているからどんどん箱に切符を入れていなくなってしまいました。私一人残されて、役場へ行く道も知らない、電話番号も聞いていない、さてどうしようかと思いました。そうしたら、昔の駅だから窓下に木のベンチがありました。そのベンチにお年寄りが、おばあさんが一人座って、膝の上の紙の袋からお菓子を出して食べているのです。このまちの人だろうと思い私は近づいて、役場へ行くにはどうしたらいいでしょうかと

聞いたら、その人は立って教えてくれました。梅雨時で雨が降っていました。ありがとうと感謝をしてから、私は外へ出ました。役場への道々、どうしてあの人はこの雨の日に駅へ来て、一人でお菓子など食べているのかと思いをめぐらしました。うちにおられない事情でもあるのかしら？　お嫁さんにいびられたのか。そんな変な想像しながら歩いていきましたが、このまちに図書館があれば、駅のベンチでお菓子など食べなくてもいいのに…と思いました。このまちにはあのお年寄りのためにこそ、図書館が一日も早く必要だと思ったのです。皆さん、そう思いませんか？　図書館なら…玄関が閉まっていてはだめだけれども、開いている限りだれでも自由に入っていけば、自分の座るところがあって、お茶も飲めるし、お菓子を食べても構わないし、今はお年寄りにこそ、しっかりした図書館が必要なのです。

これもある人から聞いた話ですが、まちに原発の交付金か何かで立派な図書館ができたので行ってみたそうです。西川図書館も多目的ホールがあって外からみるとすごい立派な建物ですが、いま話すのは、これがうちのまちの図書館かと思うような素晴らしい建物だったそうです。よし入ってみようと思って行ったら、近づいたとたんにドアが開いてしまったのです。自動ドアなどというのは、あまり経験したことがないから、そこでまずびっくりしました。でもせっかく来たのだからといって中へ入ったそうです。そうしたら、煌々とした灯りに照らされたのです。こんどは照明にびっくりしたそうです。そして顔を上げたら、目の前に本棚がずらっと並んでいました。それを見た人は、ここはわしのような本など読まない人間が来るところではなかったなと思ったそうです。まわりをざっと見渡しても座る場所もなく、それで帰ってきてしまったそうです。せっかくお年寄りに図書館をと思っても、あまりお年寄りのことを考えた図書館というのはないのです。図書館を設計する建築家などは大体若い、20代、30代、せいぜい40代の人が多く、年寄りのことなど全然頭にありません。図書館というものは小さな子どもからお年寄りまでだれにでも必要なものだということは頭では分かっていても、実際にどのような図書館にしたらお年寄りにいいのかは、若い人にはまだ分からないのです。では、どうすればいいでしょうか。

図書館に行ったら、あそこへ行けば、私の座るところがあるという図書館にしなくてはいけません。私は、本は読まないけれども、図書館に行けば私の座るところがある、そう思ってもらわなくてはなりません。さあ、今度、巻に新しい図書館ができますが、そうなっているでしょうか。現在も計画に沿って仕事が進んでいるということですが、皆さんが出かけていって、あそこへ行けば自分も座れるなと思っているでしょうか。あそこで日が差してぽかぽかしていたら居眠りしてもいいのかな、巻はそうなっていますか？　皆さんにはまだ分からないでしょうか？　本当に図書

館が私たちにとって、なくてはならないものにするためには、どうするのか。それを考えるのは実は私たち自身なのです。だから図書館の建物を、私は図書館を作ると言わないといったわけです。では何というか、私はこれを「図書館を始める」と言っています。すると始めるためにはまず何が必要かを考えることになるでしょう。そう、まずは本がいりますよね。それから、司書もいてくれなくてはだめですね。建物も素敵なものがほしい…。そういう図書館を始めるという考えで図書館の有り様を探っていけば、どのようにすればいいかが分かってくるのですが、経験の少ない若い建築家ではなかなかそこまで思いがいかないのです。年寄りなど来なければいいという考えの人もいないわけではないですね。しかし私たちは、これからますます年を取っていく世代で、これが私の図書館だと思えるものをみんなで実現していきたい、皆さんそうは思いませんか、みんながやがては年を取るのですから。

今、居眠りの話をしたでしょう。図書館に腰掛けがあって、暖かい日差しがあたっている。春先などは、本当に座っていると居眠りが出ますでしょう。うとうとしますね。そうすると図書館の職員が来て、「もしもしここは社会教育施設ですから居眠りは困りますよ」と起こしてしまうのです。私は、そういううとうとしている方がいたら、職員は膝掛けくらい持っていってかけてあげればいいのにと思っています。それが図書館で働くという意味なのですから。今、日本で一番ピカいちの図書館は、佐賀県の伊万里、伊万里焼の伊万里市です。伊万里の市民図書館がピカいちです。あそこは多分、職員が膝掛けくらい持っていくけれども、自由に使える膝掛けをだれでもお使いなさいと、積んであるのですね。いくら暖房があっても、それから冷房の季節には必要でしょうね。それは思いやりがあればできることですし、それにより客層が湧くのです。

そんなことで、本を読まない人にも、図書館には座るところがあるというお話をしました。そして座るところに当たり前のように同じソファーが10個、20個と並んでいますが、私はせっかく腰掛ける場所を作るのだったら、10脚イスを用意する、20脚用意するというときに全部違うものにしましょうといっています。そして自分がお好みのイスに座ることができるようにしましょうと…。図書館に出かけていったら、今日はあそこの席が他の人に座られちゃったなとかって…あったっていいじゃありませんか。そのくらい図書館と私たちの距離を縮める努力がいるのです。

市民が互いに交わり、文化を創り、次代に伝える

何年前にできた図書館でしょうか、私は見学に行ったのです。その図書館はまちの旧家で、古い大きなお宅ですが、林のついた土地と家を手放すことになって町に寄附をしたのです。かなり広い土地でした。いよいよそのまちが図書館を始めることになって、その建設場所に寄贈された屋敷林を充てました。古い家も活かせるものは活かし、それに新しい図書館を付けたのです。実際に子どものためのスペースは古いお宅のふた部屋くらいを続けてつくりました。そこの見学に行きましたら、玄関の前に以前からの大きなケヤキの木があって、その下にベンチが置いてありました。お年寄りが座っていまして、押し車を押して出かけてきたらしいです。いろいろお話をしたら、最初図書館ができたときに、孫がおばあちゃんを連れていってあげようと言って車に乗せてもらってきたそうですが、そうすると帰りもまた迎えに来てもらわないといけないことになりますよね。それなら自分で出かけようと思って、押し車を押してきたそうです。これはいいですよ。腰掛けも付いているから、途中で休みながらやってくることができます。

図書館は楽しいですかときいたら、私は居眠り専門ですよと答えてくれました。まあ、それは謙遜でしょうけれども、実際に居眠りもするし、お年寄り同士でおしゃべりもするし、子どもの本のそばにそのスペースがあるので、いつか知らず知らずのうちに絵本にだんだん近づいてきます。図書館に来て絵本を見て、おしゃべりをして、居眠りをして、お茶を飲んで、そしてまた押し車を押して帰っていくのです。そういう光景が一つ、二つと生まれてきています。巻もぜひ、そういう図書館になってほしいですね。

図書館から〈としょかん〉へ

読む・書く　視る・聴く　話す・奏でる　作る・遊ぶ

皆さんのところにＡ３大の大きな用紙が渡っていると思います。真ん中にひらがなでとしょかんと書きました。漢字で図書館もいいけれども、やはり図書の館（やかた）でしょう。私は図書館というのは記号だから、ひらがなでもいいし、カタカナでもいいと思っています。そこをご覧いただくと、大きな外枠には知る、学ぶ、考える、調べる、楽しむ、くつろぐと書いてあります。これが図書館です。何かを知る。何かを学ぶ、考える、調べ

る、楽しむ、くつろぐ…。そして挿絵がいっぱい描いてあります。読む、視る、聴く、話す、奏でる、作る、遊ぶ、書く、今多くの図書館で見られる催し物が書いてあります。全てを実現することにしますと難しいかもしれませんけれども、例えば畳のスペースがあって、そこで将棋をしたり、クラフトルームがあって、そこにはものづくりに励んでいるグループもあります。コンサートもします。そして、これは絵本作家のわかやまけんさんという方が書いてくださったのだけれども、当然私に同感するから書いてくださったわけですが、こういう講演会でこの絵を使うようになったのは、もう30年も前からです。そうしたら、何て言われたか、「菅原さん、これは公民館のことじゃないの」と言うのです。

もはや図書館だ、公民館だという時代ではないと思うのですけれどもね…。それは、たまたま文部省の行政の縦割りから始まって、図書館だ、公民館だという話になっただけのことです。その話をすると、少し長くなりますけれども、戦争で荒廃した図書館を立ち上がらせるために、アメリカ占領軍は大変な力を注いだのです。日本人を軍国主義から解放して、民主主義を教え込もうとしたわけです。いろいろなことをしました。私などは戦争から帰ってきて、役場へ勤めて、どういうわけか教育委員会に配属されたのです。そうしたら、占領軍がいろいろ言ってくるのです。何を言ってくるかといいますと、フォークダンスの講習をするから、職員を派遣しろとか。そうすると、「菅原、お前行ってこい」、「バドミントンを教えるから、まちからだれか出せ」、そうするとまた「菅原、お前行ってこい」。ちょうど、20歳そこそこの男の職員というのは、私しかいなかったせいもあるのですが、それでフォークダンスを習ってきまして、戻ったら伝達講習会を開いて町民に広めなくてはいけないわけです。私は、フォークダンス、スクエアダンスの講師になりました。これが民主化の先棒だなどということは考えないで、随分熱中しました。バドミントンもそうで、町で一番最初にバドミントンのラケットを振ったのは私でした。そのようにして、アメリカの占領軍は日本人を民主化するためにいろいろなことをしていました。

その中でも、図書館を最も大事なものとして考えたのです。アメリカから、優秀な図書館人を担当官として呼んで来ました。そのときの条件は、第一級の図書館学校を卒業していることでした。アメリカの図書館学校というのは、大学院レベルのライブラリースクールです。弁護士の場合はロースクールといっていますが、第一級の図書館学校を卒業していることが条件でした。実際に図書館の運営、経営に経験があることとか、いろいろな条件で８項目をカバーした人を呼んできて、日本の図書館のことをいろいろやりました。けれども、肝心の日本側の図書館員は戦争中に県立図書館の館長をしていた人や生き残りの古手がいっぱいいました。また、そういう人たちが一生懸命がんばって、やがて図書館法と

いう法律が生まれるのですけれども、占領軍が図書館に期待したのは、日本の民主化でした。住民を教化するための場として図書館を考えたのです。ところが、日本の図書館の人たちは、そんな人を集めて何かをするというのは、戦争中でこりごりしていました。戦争中は良書普及だとか何とかで、軍国主義を普及するために図書館が利用されていたので、その蒸し返しは我慢できないというので、それを受け入れなかったのです。それならばといって、占領軍が日本に普及しようとしたのが公民館なのです。そして、それがいまだに図書館と公民館の二つの流れになっています。これはもともと一つであるべきものだったと私は思っています。だから、これは「あれ、公民館じゃないの」などという人は、公民館病にかかっているのです。これこそ図書館なのです。そして、ようやくそういう考えで作られる図書館が、一つ、二つ、三つ、四つと増えてきたのです。でもまだまだ、これからです。

大きなホールなどを作って、閑古鳥が鳴いているところがいっぱいあります。そういうところなどは、ドアにカギかけてなどおかないで、高校生でも、中学生でも若い連中が楽器などを演奏する場所にどんどん使わせたらいいと思います。彼らはそういう場所が欲しいのに使える場がないのです。そういうことが出来ないのは図書館という看板の下がった役所だからだと思っています。

私は、アメリカに行って、非常に感心した図書館が一つありました。そこの館長さんの名前がたまたまグレン・ミラーといって有名な楽団と同じなのでよく覚えています。この人もなかなかの傑物なんですが、その人と話をしていました。すると、若い連中がなかなか図書館に来ない、公園でたむろして楽器などをいじっている。そういう連中が図書館に来ればいいのにと館長は思ったそうです。たまたまその図書館の地階がホールになっていたので、彼らが図書館に来れるようにそこを開放して自由に使わせることにしたということでした。それから、音楽をやっている若い連中というのは、新聞とか雑誌か何かにのっていたりするものなのですね。その新聞をたくさん買って館内において自由に持っていけるようにしていました。そうすると市民が入ってきて、持っていったりするそうです。いろいろな工夫をその館長はしていました。私達の世代ですと、「足りぬ足りぬは、工夫が足りぬ」ということになりますけれど、図書館もそうです。全然工夫が足りません。もっと工夫をして、図書館が市民の中で本当に役に立つようにしなければなりませんね。だれからも喜ばれ、歓迎されるようにしなければなりません。そして、図書館で過ごした日々がすばらしい記憶として残っていくようにするのです。それは何も難しい話ではないのです。

図書館には人生と同じように友達が必要です

４番目、図書館には人生と同じように友達が必要です。アメリカも北欧も図書館の大変進んだ国です。大勢の日本の図書館の人たちが勉強しに出かけていきます。私も仲間と一緒に出かけたりして、いい勉強をさせていただきましたが、アメリカにあって北欧にないものが一つあります。それは何かというと、アメリカの図書館にはほとんど例外なしにライブラリー・フレンズ、「図書館友の会」、あるいはフレンズ・オブ・ライブラリーがあるのです。北欧へ行ってその話をしたら、北欧にはそういうものが全然ないのです。なぜ無いのかですが、必要としないから無いわけですけれども…。

北欧の話は一応置いておくこととして、アメリカの図書館友の会、ライブラリーフレンズ、これはかなり古い歴史があるのですが、アメリカの図書館協会の中に、「全米図書館友の会」、つまりアメリカ中にある図書館友の会の総元締めがあって、そこが図書館友の会のハンドブックを出しています。それを見ると、冒頭のところに「図書館には人生と同じように友達が必要です」と書いてあります。人生と同じように友達が必要、なるほど、そうですね。皆さんも、それには同感できるでしょう。人生にも友達が必要です。いや、私にはそんなものはいらないというおへそ曲がりもいるだろうけれども、友達は必要です。

では、友達というのは何でしょう。これは、私も本に書きましたけれども、やはり本当に親しい関係、意見を言い合う、場合によっては忠告もし合うという関係です。では、市民と図書館がそういう関係を持つということの意味や大切さ、これは一番冒頭に申し上げた本の森を育てるのが市民、住民だということと通じるものです。結論を言うと、西川図書館にも西川図書館友の会が欲しいのです。岩室にも、岩室図書館友の会が欲しいのです。すべての図書館に友の会があって、それが新潟市全体として、またお互いに腕を組む関係ができれば、図書館がさらなる発展をするのです。それは間違いのないことだと思います。ところが、友の会と言っても、そう簡単にはいかないのです。これも最初にお話ししたことに戻りますけれども、一体図書館はだれのものか。

図書館は誰のものですか　住民の、住民による、住民のための図書館

今、市民図書館と呼んでいるところが、日本中にいくつあるでしょうか。そうたくさん

はないのだけれども、伊万里市民図書館、高知市民図書館、石狩市民図書館…、まだほかにもあると思うのですが、しかし本当に市民図書館という意味を理解して、そう呼んでいるかどうか危ないところもあるのです。ある図書館ですけれども、市民図書館と名乗って長い年月がたっているのですが、先だってもらった年次報告のような冊子に、市民の図書館何年とあって、それでいいのにどういうわけか、「市民」と「図書館」との間にくるっと挿入マークをして、「ための」と入れてありました。市民の図書館でいいものを、わざわざ市民のためのというように手書きできゅっと入れてある。何だと思いますか？
図書館は市民のためにあるのだから、何も不思議ではないですかと思われるでしょうが、皆さんがそのようになさるのならいいのです。私たちのための図書館という意味で使うのであれば…。ところが、図書館がその冊子を作って、図書館側が「ための」と入れますと、この図書館はあなたたちのためにやっている図書館だという姿勢が見え見えになるのです。私たちは市民の図書館、市民による図書館、市民のための図書館というのは、市民の立場でそう言うのです。ところが図書館サイドから言うと、これは市民の図書館ではなくて、市民のためにやっているのだよということをわざわざ宣言していることになります。それでは、図書館と市民の対等な関係や発展がないと思います。

市民のというのは、先ほど「大草原の小さな家」のお話をしましたが、みんなで力を出し、お金も出して学校を作りました。それを教会としても使いました。あのお話のドラマの中には出てこないけれども、きっとあのまちには図書館もあるに違いないと思うのです。そして、その図書館はみんなが大工仕事をして、材木屋さんが材木を提供したり、お金はみんなで払ったかもしれませんけどもね。そのようにして作った図書館だから、市民の図書館なのです。つまりこの図書館は、だれに由来するかということが市民の図書館という意味になります。「市民のための」は本来、これは私たちのために、私たちが作って、私たち自身、家族、友人、まちの人たちみんなのためにあるのだよということを私たちに言い聞かせていることになります。そして、これは市民による本の森と一緒です。私たちが手を加え、声をかけ、力を出して育てていくものです。それが市民によるという意味になります。この市民の市民による市民のためのということをしっかり理解していきたいと思うのです。それがないと、図書館友の会を作りましょうと言っても、うわべの格好だけになってしまうのです。

図書館友の会

今、日本にも図書館友の会、あるいは似たような名前の会なり、運動があるけれども、本当に図書館が市民の図書館、住民の図書館だということが分かっているのかなと、少し首をひねってしまいます。図書館がきっかけを作ることはあるだろうけれども、やはり市民が自発的にやらないと、こういう運動は盛り上がらないし、続かないと思います。今日の私の紹介で館長さんにおっしゃっていただいたけれども、『図書館友の会養生訓』というものを作りまして、皆さんの手引きにしていただいています。

私たちの図書館ということは、そのとおりに違いないけれども、本当に私たちの図書館になるように、図書館として発展するように、図書館として充実するように、私たちが力を尽くすというのはそう簡単ではありません。今日は、原則論だけお話しするのだけれども、本当に皆さんがそう思ったら、まず最初は３人寄って考えればいいのです。３人寄ればいい知恵が出るでしょう。それが５人になる、７人になる、10人と増えていったときに初めて西川の図書館は本当にこの地区の市民にとっての財産として認知されてくるはずです。そしてその人たちからもっとよくしなくてはいけないという声が上がるようになるはずです。

図書館は５年で１歳

図書館は５年で１歳と私は言っています。図書館ができて５年たちました、10年たちました。それは５歳とか、10歳ではないのです。５年でやっと１歳、そうすると成人するのに何年かかりますか。100年ですね。そのくらい図書館とのつきあいは息を長くしなくてはいけません。容易ではないけれどもやらなくてはいけない。10年で２歳、まだ学校に上がれない。６歳になって学校に入学します。そうすると30年たてば学校に入れるのかなとなります。ということは、もう今日、明日のことにとらわれず、私の生きている間には、図書館の次の姿は目にできないと思うくらいの覚悟で図書館と付き合う、ということになります。

図書館づくりを成功させる定石

図書館づくりというものには定石があります。まだまだ新潟市はこれから地域の図書館が作られるでしょうね。今、人口が80万あるそうですから、平均して２万人に一つの拠点が必要だと思いますのでそうすると40館ですね。あといくつ必要になるでしょうか。だから、図書館づくりはまだまだこれから可能性があるのです。これも私がだれかに教わったとかではなく、実際の図書館にかかわりながら自分で考えたことですけれども、やはりはじめにしっかりした計画が必要なのです。どういう図書館にするのか。そのために何をどのくらい持たなくてはいけないか。そのための建物はどうするか。そういうことをきちんと計画して持たなければならないのです。最初の計画づくりが大切です。そして、その計画づくりにはまず図書館長が選ばれなければなりません。次に住民が加わる必要があります。そして図書館の経験のある専門家も加わります。この三角形、トライアングルが計画づくりにとても大切です。どこか一方的に教育委員会が計画を書き上げるとか、あるいは既にある図書館が担当するとか、まあ担当することがあったってもいいけれども、やはり住民がしっかり関わって、自分たちが欲しい図書館というものをはっきり出していくことが大切なのです。そして、それに図書館計画のプロ、あるいは図書館を実際に実現させた経験のある図書館長とか、そういうプロが入って、道案内をしてくれる、こういう体制で、まず計画を作るということが重要なポイントです。

私が図書館協会にいたころの話ですが、図書館を作るというところの図書館長などがよく出かけてきました。今度こういう設計図が出てきたがどうしたらいいか、意見を言えと言われたけれども、どうすればいいでしょうかと図書館協会に相談に見えるのです。もう図面ができてから、どうですかと聞かれても、これは相撲で言えば、土俵から足が出ている状態なのです。つまり勝負が付いているのに、形式的に図書館に意見を言わせるやり方です。そういうことが頻繁にありました。私はそれを「ぐるぐる巻き図面傾向型」と呼んでいました。そんなふうに図書館がいくつも作られてきたのです。私は、これではいけないと思いました。計画を作るお手伝いをしなくてはいけないと思って、協会を辞めた後、研究所を作ったのですが、まずは図書館の計画がしっかりしていないといけないわけです。その計画に一番大事なのは、住民がきちんと参画することなのです。単に意見を聞かれるというのではなく一緒になって計画を作ることが大切です。

その次に定石の２は、設計する建築家を選ぶことです。この選び方を間違わないようにしなければなりません。一番いいのは、皆さんが図書館をご覧になってみて、あの図書館こそ私たちのまちに欲しいというものがあれば、その図書館を設計した建築家をぜひ起用したいと言って構わないと思います。そういう選び方を特命というのだけれども、役所の仕事ですからその方法は難しいことが多いものです。それで一般的には競争させられるのです。設計競技とか、設計プロポーザルとかあります。そのときに、きちんと公平に競争ができるようにして、設計者が選ばれるのがいいのです。市長や町長がどこかで設計者を決めてきたというやり方、それではだめだと思うのです。

３番目、その設計者が決まった後、設計はプロの仕事だから後は任せていいかといいますと、任せられないのです。どんなプロでも、どんないい経験を持っている建築家でも、一つ一つの図書館は全部違うのです。また、図書館の設計は市民との関わりの中で一つ一つの階段を上がって実際の形となっていくものなのです。そういうことをわきまえておくことが必要ですし、時間がかかったとしても住民がしっかりと関わっていくことが大事です。後はお任せ民主主義ではだめなのです。そういう定石をきちんと踏まないと、どこかで見たことのある使いにくい図書館が生まれてくるということになりかねません。まだこれから先、新潟は幾つも図書館が誕生すると思うけれども、しっかりそういう定石を踏んで、みんながこの図書館は本当によかったなと思えるように、これは皆さんで努力していただかなくてはいけないと思います。

図書館が良くなるも、ダメになるも住民次第

大分お話が長くなりましたけれども、結論を言うと、図書館が良くなるのも、だめになるのも、皆さん次第なのです。さあ皆さん次第と言われても…と思うかもしれませんが、これは私の50年の経験から申し上げていることなのです。つくづくそう思います。それから市長や町長が方向を間違わないように見守っていくことも、これも皆さん次第なのです。

もう一つ申し上げます。私の翻訳したアメリカの本でアメリカの図書館の基準を書いた本の中に、こういう１ページがあります。それは、図書館の予算を増やしたいと思ったとき、それは図書館の職員の仕事だと思っている人はいませんか？　図書館の予算がこうあるべきだという要求は、住民の責任ですよ。館長さんや職員の方が図書の予算要求をするという日本の仕組みは仕組みとしてあるので

すが、最終的にこの予算でいいのかどうかを判断するのは住民です。市民の声をどれだけ強く行政に反映するのか、それは住民次第ということになるわけです。

今、どこもかしこも財政難だと言います。確かにそうでしょう。けれども、その財政難の中で、図書館というものをどう位置づけていくのかということ、図書館の力を付けていくかということは、役所任せではいけないと思います。アメリカ・カリフォルニア州のずっと南、メキシコに近いところにサンディエゴという軍港のまちがありますけれど、カリフォルニア州が住民投票で固定資産税をすごく下げたことがあります。それは住民投票の結果なのですが、そのアメリカには全部ではないのですけれども、図書館税というものがあります。図書館税は固定資産税に比例することになっていたため、私たちがサンディエゴに行ったときのことですが、図書館税が自動的に縮小されてしまいました。そうしますと図書館の予算が連動して縮小されてしまったのです。それでサンディエゴ市はどうしたかというと、財政状況に合わせて分館を幾つか閉鎖したのです。分館を閉鎖し、中心図書館はそのままにしてサービスを中心館に集中させたのです。今まで分館を利用していた人たちで閉鎖されたところの分館の人たちは、中央館に来てくださいよという状態になったのです。それから職員も減らされました。職員の等級があって、上のほうから５人いた人を４人に減らすと、減らされた１人は下の等級に移るのです。その下の人は２人下へ移る。さらにその下のクラスは３人下へ移るのです。そうしますと一番下の若い人がはみ出すわけです。聞いたら、若い人はほかの州にいけばまだ働けるからという話をされました。

サンディエゴに行ったときに、その図書館、分館に行きました。分館には、財政難で図書館の予算が削られます。分館の閉鎖もあります。もし、市民の皆さんがお力をくださるなら、財政支援をしてくださいと書いてありました。図書館が市民に寄附をしてくださいということなのです。こういうことは、これがアメリカだからと言えばそうなのでしょうが、なかなか日本人の私たちにはまねできないことです。アメリカの図書館友の会など、そういうときに図書館の力になっている例もたくさん見てきました。私たちはまだまだ図書館のためにできることがあるはずです。ただ図書館のお客さんでいればいいというのではないということをしっかりと分かってほしいのです。

そのことをご理解いただければ、今日のつたないお話が少しはお役に立ったのかなと思います。みなさん、どうもありがとうございました。（拍手）

質疑応答

（会　場）

私たちの西川図書館も５周年ということでやっと１歳になったのでしょうか。でも、すばらしくよくなったと思って、本当にありがたく思っております。

一つお聞きしたいのは、先生のレジメの(1)のところに、おなかの赤ちゃんも図書館のお客さんということでしたが、私はそこに続けて、年を取って自由に出歩けないお年寄りもお客さんというように考えたいと思っています。どうしてかというわけを言いますと、例えば、私の妹などは、ボランティアをしていて図書館から紙芝居を借りて、施設に行ったり、学童保育のところへ行ったり、いろいろなところで紙芝居をやって、子ども達に見せているのです。例えば、紙芝居とか、ＤＶＤとか、絵画などを個人に貸出しますが、施設みたいなところにはだめなのでしょうか。紙芝居はいいとしても、ＤＶＤはデイサービスなどでは使えないものなのでしょうか。それから、絵画などたまには施設のお年寄りに絵画週間といって借りてきて見せてやるのもいいのではないかと思うのですけれども、自由に歩いて来て借りられないのです。うちの人にもなかなか頼めないという人たちのために、なにかそういうことができる方法はないでしょうか。また、ＤＶＤを貸出するのは商売ではないのですが、法律で禁じられているのか。そこをお聞かせ願いたいと思います。

（館　長）

ありがとうございます。図書館は全ての市民に利用されることが望ましいので、お年寄りに活用していただければそれに越したことはありません。ところがＤＶＤの貸出は個人向けだけで団体には貸出ができません。これについては図書館ではどうしようもないところがありまして、現状では著作権法で映像資料は権利者との承諾と契約に基づいて貸与を認めているのです。図書館で貸出をする場合には著作権の処理をしたもの、市販の価格の上に著作権者に補償金を払って購入しています。それで個人が楽しむことについては、貸出ができるけれども、団体については貸出ができないことになっております。団体でどうしてもＤＶＤを借りたいということになりますと、新潟市の視聴覚センターに入っているものが利用できます。昔は16ミリフィルムだけでしたが、今はＤＶＤもありますので、それを団体でお借りになることができます。福祉施設ですとか、社会教育団体だとか、民間

のグループ名で借りることができますので、そのようにしてお使いいただければと思います。そのほかの図書や紙芝居の図書館資料については団体でも借りられます。ＣＤにつきましては新潟市の場合、まだ団体に貸し出すということはしておりません。

（会　場）

図書館の専門の先生から来ていただきまして、図書館の基本というようなお話を聞きまして、大変参考になりました。ありがとうございました。先生は、北海道の役場の公民館に勤務されたということですが、私どもの旧西川町も平成17年３月に新潟市と大合併しまして、新潟市になり西蒲区となったわけでございますけれども、それまでは公民館図書室でして職員が大変苦労していたわけです。先生も先ほどお話しになったように、公民館職員が土日、休みの日あれやこれやで出ていまして、それが合併になりましたら、図書館とか、公民館とか別々に区分されまして、今は別々の組織で仕事をしています。先般は、新潟市においても公民館が事業仕分に出されまして、予算の削減という話も出されました。それは時代の趨勢ということもあるのでしょうが、私どもの地域にとっては、公民館は住民の窓口･茶の間ということでありますので、到底私どもには受け入れられないことでございました。私は合併後の図書館をみている立場からいいますと、一番役所の中で一生懸命働いているのが図書館ではないかと思っています。その中にいる職員、スタッフにおいても優秀な人がいて、一生懸命働いております。私はそう思ってみております。

そこで、先日私は長岡市の図書館へ行ってきたのですけれども、そこでは開館が９時半なのです。新潟市の図書館は10時なのです。それから、ここは毎週金曜日が休館日でございますけれども、今の時代でデパート、スーパーなどにおいても、365日開業しているわけですから、先生がここで言われるように、図書館がよくなるのも、だめになるのも住民次第だということを提言されていますし、開館時間が９時半くらいになればいいのではないかと、これは私一人でなくみんながそう思っています。また休みが金曜日というのは、やはり土日は働いている人がいますから、休館日は必要だと思いますけれども、それでも金曜日も開館していただきたいと思っています。ここの図書館もそうですけれども、正職でない人も入れてメンバー構成を考えてやれば、警察や海上保安庁なんかも365日やっていますので、ある程度運営できるのではないかと思います。先生は海外の図書館もよく見ていらっしゃいますし、日本全国見て回っていると思いますが、そういう改善の余地が、この新潟市の図書館においてはあるのではないかと思いますので先生のご見解をお聞きいたしたいと思います。

（菅　原）

今の質問は、これからの図書館の有り様に

かかわって来ると思うのですけれども、例えば開館時間にしても、休館日にしても、本当にどの位の住民が必要としているものかどうかで変わってきます。今の流れとして、365日図書館を開けとか、そういう話も出ています。皆さんが要求することとそれを実現するための住民負担によっても変わってくると思います。新潟の中央図書館も市職員だけで運営しているわけではありません。委託の部分がどんどん入ってきています。それが本当に図書館の発展のためになっているかどうかという評価も、皆さんがしなくてはいけないのです。開館時間や休館日というのは住民が図書館に要望するなかの一つの事項ではあるけれども、これは図書館の根本の有り様に関わる話かと思うのですが、答えは一つではないので、その中から何を選ぶかは皆さんが答えを見つけていくことではないかと思います。

開館時間のことで言いますと、図書館が市民を迎えるのに、毎朝しなければならないことがあります。商店なら売場をキレイにし、昨日売れた商品を補充し、お客さんを気持ちよく迎える準備をします。図書館でも、それは大変大切なことです。毎朝開館の前に、棚を整えます。職員が分担して棚の前に立ち、棚と、ということは棚の本たちと対話をするのです。昨日この棚の本に市民はどう向き合ったかを感じ取るのです。勿論棚の整頓もします。ところが、いま多くの図書館では、貸出デスクの仕事を業者任せにし、司書が書架と対話することがなくなっています。私はこれが図書館の劣化を招く大きな原因と考えるのです。

そして、この書架との対話をしっかりする。それには時間が要ります。出勤時間イコール開館時間ではありません。少なくとも1時間はかける、10時開館は必要な要件、これが私の考えです。

（館　長）

図書館から一言。開館時間の延長と開館日を増やしてくれという市民の要望は、ずっと昔からありまして、少しずつ私どもも改善を重ねてきております。さらに開館日、開館時間を延長してほしいということでございますので、我々も真摯に受け止めて、どういう方法でそれが可能になるのかということは考えていかなければならないと思っております。ただ、こういう右肩下がりの経済状況の中で、開館日を増やすとか、延長するという場合、予算や人員はそうそう要求できないものですから、現状の中でどこまで対応できるのかということは、非常に厳しい面がございます。また以前は西川図書館も月曜休館をしていたわけでありますが、市内の県立図書館も市立図書館も全館月曜日が休館だったときに、月曜日にお仕事が休みの市民からたくさんの苦情が来ていまして、それで中央図書館ができたとき区の中に月曜日休館の館と金曜日休館の館と分けたという経緯がございます。金曜日を開けたほうがいいとか、月曜日も開けたほうがいいというのはおっしゃるとおりなの

ですが、現状の体制での実施についてはなかなか厳しいので、これから鋭意検討していかなければいけないかと思っているところでございます。その辺について早急に回答をせよと言われるとできないのですが、もう少し時間をいただきながらこのことに関して考えていきたいと思いますので、どうぞご理解をいただきたいと思います。

（会　場）

図書館は５年で１歳という言葉を初めて知りました。西川図書館ができるときに、私の知り合いの方が西川図書館の館長にと言われたそうですが、役所からは２年間の期限付きと言われて、２年では図書館長の仕事は果たせないといって断り、大阪のほうへ帰っていきました。そういったことを思い出しておりました。

お伺いしたいのは、５年前、雑誌『世界』に図書館のことが出ていまして、そこでは「自殺したくなったら図書館へ行こう」というフレーズの記事が出ていたのです。その中で、全国の図書館で、図書館という看板を掲げた役所というところ、それから無料貸本屋が95％で、あとの５％が本物の図書館であるといった厳しい言葉が書いてありました。今は、先生が見たところ、どのくらいのパーセントになっているのでしょうか。お尋ねしたいと思います。

（菅　原）

雑誌『世界』のその記事の終わりかどこかに、私がそう言っているというコメントが載っていたのですよね。自殺したくなったら図書館へという題ですが、もう一つ言うと、本当は自殺したくなってからでは遅いのです。それは、雑誌とか何かのジャーナリズムの取り上げやすいタイトルだからそうやっているのであって、図書館は滋賀県の能登川という町の図書館なのだけれども、私はそういうマスコミに乗っかった話を信用しません。自殺したくなったら図書館へといっても、自殺したくなったらするわけなのだから、図書館へ行ってもどうしようもないと思うのです。アメリカでどうのこうのという話も一緒に書いてあるけれども、私はマスコミの調子のいい話をまともには受け取らないほうがいいと思っています。

それで、図書館の半分は図書館という看板を下げた役所だと、残り半分の90％くらいが無料の公営貸本屋だと、残った全体で言うと５％くらいになるのでしょうか、それがまあまあの図書館だということが、そのときに私の言った言葉です。本物の図書館は今、もっと減っています。私は、そのお話をしたころは、今のような図書館の仕事を民間の業者に委託するとか、全体を指定管理者という制度で民間に丸投げするということはまだなかったか、ごく少なかったころの話なのです。今はというと全国に蔓延しています。残念ながらまともに批判する人が少ないのです。図書

館を民間に丸投げしていいはずがないじゃありませんか。それから、貸出のデスクの業務だけをどこかの会社に委託するところも増えています。それでいい結果が出ている話はないのです。市長なり町長が言うのは、民間に委託することによって、何千万か、何百万か経費が節減できましたということが一つです。もう一つは、貸出などのサービスデスクに立つ職員が、ニコニコしてとても評判がよくなったというこの二つだけなのです。

それでそのまちの住民が結構なことだねというのであれば、それはそれだけの話なのです。住民次第といったのはそういうことなのです。みんながいいと思っているのに、私があれこれ言っても意味がないじゃありませんか。だから、図書館がよくなった例があるかという問いに対しては、思いつかないですね。だめになった例はたくさんあります。なぜだめになるでしょうか。賢い利用者が見限ってしまうからでしょうね。何だしょうがないよと、役所のやっていることだから、どうせ言ったってなるようにしかならないよと言ってしまい万歳してしまう…、でもそれでは図書館は終わりなのです。

一つだけ、巻の図書館の話を伺ったときに思ったのです。私は、まだ巻という町があると思っていたのです。巻という町の名前がどうなっても構わないのだけれども、巻に図書館をではなく「巻を図書館に」、巻という町を図書館にしたらいいと考えるのですが、皆さんどうですか。そういったことは考えられないといいますか？　私はそんなことはないと思っています。

（会　場）

質問よろしいでしょうか。私は、千葉県柏市に住んでおりました。柏市で先生にもお会いしたことがあるのですけれども、柏市では新潟市もそうなのですが、小さな図書館、それは図書館と呼べるものではなく公民館の図書室のようなものをたくさん作っていました。身近なところに図書館のサービスポイントがあって気軽に本を借りられることはよいのですが、今、息子たちが住んでいますのでときどき行ってみますと、１館に一人しか人がいません。以前はちゃんと司書がいて、職員二人おりましたけれども、今は本の貸出をするために一人だけ雇われているという形の分館がぞろぞろとできてしまっています。いま私は、新津市に引っ越して来ました。新津も新潟市と合併しました。巻もそうですが新津も図書館を建て替える話が出ています。巻は以前住民が文庫を開かれたりして、一生懸命にこれから図書館を作る足がかりにしようとなさっていました。そのときに私の文庫の本を上げたりしました。お寺の方が本を全部いただいていかれて文庫を開かれたというふうに聞いています。その後、どうなっているかは、私も分かりませんけれども。そういうことをしてきました。

新潟市でも人口２万５千人に１館というような計画があるのでしょうか。非常に市域が

広いわけですが、人口80万人で40館とおっしゃいますと、現在18館あるのでもう22館つくることになるわけです。

私たちは新津の図書館を建て替えると聞き、今日のお話を聞きにまいりました。菅原さんのお話を聞くことができて、とてもよかったと思っております。

（菅　原）

まず、自分のところで図書館がなければ求めていく。あって思わしくなければ、もっとよくするために努力する。これしかないのです。今、巻に図書館をではなくて、巻を図書館にと言いました。私の作戦を説明するとですね。いまは、新しい図書館が良くも悪くも否応無しに誕生することが決まっているわけですよね。本の予定はどのくらいか分からないけれども、4万くらいあるとするでしょう。そうしたら、巻の人口は幾らでしょうか。

（館　長）

約3万人です。

（菅　原）

3万人ですと、まず最初の段階で30%、約9千人くらい本を借りるお客さんにします。9千人の住民が図書館のカードを持つようになりますね。今、貸出限度は一人何冊ですか。5冊ですか？

（館　長）

一人10冊です。

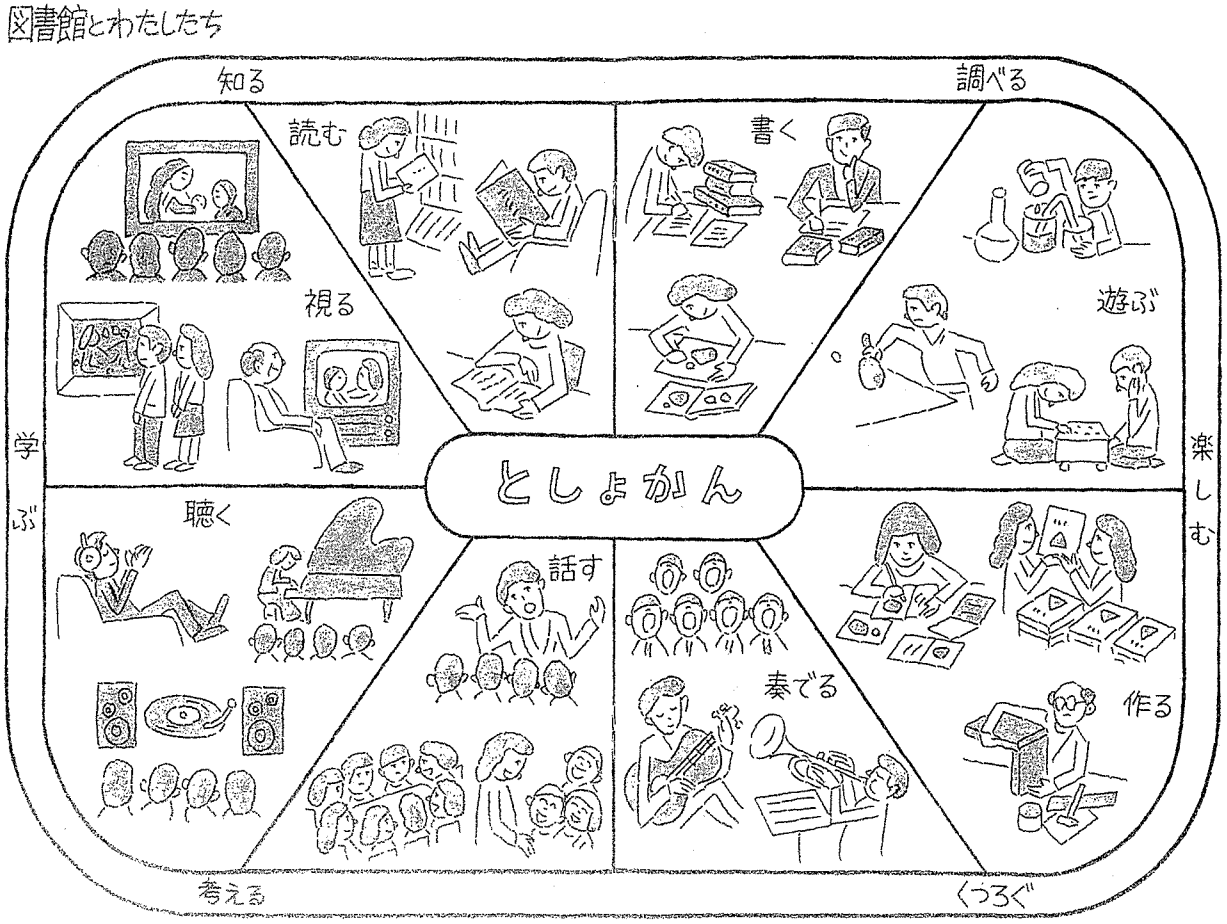
（菅　原）

それでは、9千人の人がみんな図書館に行って、一人10冊ずつ本を借りればいいのです。すると9万冊になるでしょう。図書館の書架は空っぽになります。それは、史上最強の大作戦です。図書館から借りた本をどうするのか。みんな自分のうちに小さな本棚を用意して、図書館から借りてきた本をそこへ並べて、家じゅうの家族で本を見るのです。隣の人が家に訪ねて来ますよね。あなたはそれを読んでいるの？　じゃ、読み終わったら私に貸してちょうだいねと言って、隣の人が借りていってもいいです。本はだれが今借りているかは、図書館のコンピュータで全部把握しているわけだから、まちの中に図書館の本が流通して構わないのです。そうすることが、まずとりあえずの「町を図書館に」ということなのです。本当に図書館は空っぽになりますよ。アメリカへ最初に行ったときに、ニューヨークの街角の図書館へ行ったときの話です。誕生してまだ何週間もたっていないとところの館長さんの話ですが、放っておいたら、図書館の本をみんな借りていってしまうから、今、冊数を制限しているのだと言っていました。そのときにどういう表現をしたかというと、放っておくと真空掃除機をかけたように何もなくなってしまうと言ってました。巻に限らず、町中に図書館の本があればいい

のです。それを補充するくらいの税負担は皆さんがしているのですからね。だから、３万人の人口であれば、最初のスタートでどのくらいの本を用意するか。３万人だと12万冊くらいは必要なのです。３万人の人口であれば、あそこの東北電力の空き家の１階部分は1,000㎡だけれども、本当はあの３倍が必要なのです。そこで何人の人が働くのかについては、30人は働かなくてはダメでしょう。そうしなければ、皆さんが払っている税金に見合ったサービスにならないのです。私の話は皆さんをけしかけるような話に聞こえるかもしれませんが、皆さんの力の１％でもいいから、みんなで出し合っていただけたらと思います。

（館　長）

ありがとうございました。時間も大分オーバーしますので、これで講演会を終了させていただきたいと思います。もう一度、菅原先生に大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。（拍手）

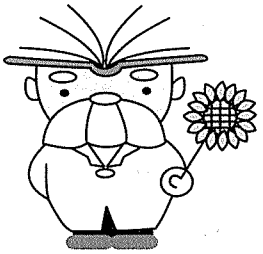


◆あとがき◆

新潟市は平成17年３月21日に近隣12市町村と合併したのち、同じ年の10月10日に旧巻町と合併、人口約81万人の都市となりました。平成19年４月１日には８区の行政区をもつ政令市に移行しました。西蒲原郡だった西川町、巻町、岩室村、潟東村、中之口村の５つの町村が１つの区となり西蒲区に衣替えしたのです。この変化は非常に大きいものでした。激動といっても過言ではない変化です。西川図書館は、住民要望が以前からあったのですが、この平成の大合併の直前に建設計画が具体化しました。そして建設検討委員会が作られ市民の意見を聞きながら大急ぎで建設に取り掛かりました。開館は合併直後の平成17年７月23日でした。西川に念願の図書館が完成したのです。それから５年。地域の人が使いやすい図書館になるよう努力をしてきましたが、全ての要望に答えられているとはいえません。しかし、来館者調査では市内の他の図書館に比べて満足度が高くなっているのです。施設・設備や図書が新しいことと、職員の対応も利用者から喜ばれていることがその理由として上げられます。いつまでもそうであってほしいと願っているところです。きっとそれは、図書館職員の今後の努力にかかっていると私は思っています。

講演された菅原峻さんは、図書館は５年で１歳だとおっしゃっていました。図書館が成人する20歳になるには、100年かかることになります。それは気が遠くなる年月です。しかし、図書館はそのくらいの年月の尺度で考えなくてはならない施設なのだということだと思うのです。

これからも、西川図書館の１年１年を利用者とともに築いていきたいと考えています。どうか、市民の皆様、西川図書館をよろしくお願いします。

2011.2.14　　新潟市立西川図書館　館長　松原　伸直

西川図書館５周年記念
菅原峻さん講演会「みんなの図書館・わたしたちの図書館」講演記録
平成23年３月14日作成
新潟市立西川図書館
〒959-0422　新潟市西蒲区曽根2046
電話 0256-88-0001　fax 0256-88-2458
Eメール：nishikawa.cl@city.niigata.lg.jp